

## 英語からことばを考える

### －英熟語から見えてくる言葉の構造－

外国語学部英米学科 森田 久司

#### 1. はじめに

本講座では、英熟語のなかでも句動詞とよばれるものに注目し、単語などと異なり、丸覚えをせずとも、意味が予測できるような方法をいくつか示す。紙面の関係上、句動詞のなかでも、動詞の後に、二つの要素が来るものを、特に、動詞の後に名詞句と前置詞句が続くものを主に扱う。たとえば、Mary put a watch in the box.のような、動詞 put の後に、名詞句 a watch と前置詞句 in the box があるようなケースを扱う。二つの要素といっても、何でもいいわけではなく、We played the piano in the concert hall.のような例文では、動詞 play の後に、名詞句 the piano と前置詞句 in the concert hall の二つの要素があるわけだが、この場合の in the concert hall は動詞 play にとって、必ずしもなければならない要素でなく、省略しても、問題のないものである。したがって、この場合は、in the concert hall を要素のひとつとして数えない。同様に、She started the game at 9 o'clock. の at 9 o'clock も要素の一つに数え上げない。

#### 2. 熟語を理解するには

##### 2.1. 前置詞から意味のわかるもの

ここでは、前置詞句の前置詞から意味が予測できるものを見ていく。先ほどの例を繰り返す。

##### (1) Mary put [a watch in the box].

この場合、たとえ動詞 put の意味がわからなくても、文全体の意味を予測することは可能である。それは、(1)の括弧で括ったところに注目することである。後でも何回と出てくることであるが、括弧の中は、(主語が引き起こす)ある出来事が起こった結果の状態を指すことが多い。(1)の場合もそうで、主語が引き起こす何かが起こった結果、「腕時計が箱の中にある」状態になったとわかる。したがって、前置詞の基本イメージとして、A in B であれば、「AはBという空間にある」とさえ押さえていけば、(1)の意味は何となく予測できる。すなわち、Mary が何かをした結果、「腕時計が箱の中にある」状態になったのである。よって、「Mary が腕時計を箱の中に入れた」という意味がたやすく予測できる。以上の put の例は、必ずしも英熟語とは見なされないが、以下に示すように、英熟語として、丸暗記を強制されるようなものに対しても、上の方法は有効である。

##### 2.1.1. Prevent A from B

##### (2) Insect spray will prevent [mosquitoes from biting you].

(2)の例文は、いわゆる、prevent A from B「AがBをするのを妨げる」という英熟語であるが、この場合も、from の基本イメージとして、A from B といった場合、「AとBとは離れている」ということを押さえおけば、mosquitoes from biting you から、「蚊があなたを刺すことから離れている」

すなわち、「蚊があなたを刺せないでいる」状態が主語によって、もたらされたことがわかる。よって、「虫よけスプレーのおかげで、あなたは蚊に刺されない」のような意味が予測できる。同じような例に keep ~ from…「～を…に近づけないようにする」や discourage ~ from …「～が…するのをやめさせる」などがある。

### 2.1.2. Provide A with B

この熟語は、「A に B を供給する」という意味であるが、この場合も A with B に「A と B は一緒; A が B を所有」などの意味があることを知っていれば、簡単に予測できる。以下の例文で考えていく。

(3) The tour company will provide [everyone with lunch].

(3)の場合も、括弧内に注目し、everyone with lunch で「みんなが、昼食と一緒にいる」状態を表していることがわかり、その状態を旅行会社がもたらすと考えれば、「旅行会社がみんなに昼食を提供するでしょう」という意味が予測可能となる。同様な例に、present ~ with …「～に…を贈呈する」や furnish ~ with …「～に…を備え付ける」などがある。

### 2.1.3. Rob A of B

この熟語は「A から B を盗む」という意味である。以下の例文を考えてみる。

(4) They robbed [us of money].

この場合も、括弧内に注目するのだが、of の基本イメージは、A of B で「A は B の一部」であるため、これをそのまま適用すると「我々はお金の一部」となって、おかしい意味になってしまう。ここでは、A of B の場合、「A と B が離れる」という意味を知っている必要がある。このことは、歴史的に、of と off がもともと同じ語であったためであり、その名残が熟語に残っていると考えられる。そうすると us of money で「我々とお金が離れている」状態を指すことがわかり、それを主語である they が（奪い取ることにより）もたらしたことになる。同様な例に clear ~ of …「～から…を取り除く」や cure ~ of …「～の…を治す」などがある。

## 2.2. 前置詞以降が省略されている場合

以上、動詞の後に、名詞句と前置詞句が明示されている場合を見てきたが、このサブセクションとその次のサブセクションで見ると、動詞のあとの二つの要素がはっきりと表れないケースもある。最初に前置詞句の前置詞のみ現れるケースを見る。

### 2.2.1. Bring A out, bring out A

これも例文を元に考えていく。

(5) Murakami Haruki brought [a new book out] last week.

この場合、out という前置詞（不変化詞とも呼ばれる）のみが残っている。本来は、out のあとに (in) the market（「外に出た結果、市場に広まった」という意味になる）などが省略されていると考えられるが、重要なのは、out の基本イメージとして、A out で「A が外にある」ということを知っていれば、a new book out で、「新しい本が外にある」状態を指すことがわかり、その状態を Murakami Haruki が先週もたらしたということになる。語順について、ひとつ注意すべき点は、上のような前置詞のみ残っている場合は、以下のような語順も可能である。

(6) Murakami Haruki brought out a new book last week.

(6)では、out と a new book の語順が入れ替わっている。重要な点は、(5)が基本語順であることである。(6)を基本語順とみなし、out を前置詞とみなすと、bring には自動詞の用法があることになってしまうが、bring には他動詞の用法しかない。

もう一つ重要な点は、名詞句が代名詞の場合、なぜか、(5)の語順しか許さないことである。したがって、Murakami Haruki brought it out last week.となる。

### 2.2.2. Hand A in, hand in A

例文をまず見てみる。

(7) Mary handed [her homework in] yesterday.

(7)も(5)の場合と同様に、in の後に、someone's hands「誰かの手元」などの語句が省略されていると思われるが、それと A in B で「A は B のなか」という基本イメージを押さえておけば、her homework in (someone's hands) で「宿題が誰かの手元にある」状態を指し、それを Mary がもたらしたわけだから、全体として、「メリーが昨日宿題を提出した」という意味になる。この場合も、(5)と同様に、語順を以下のように変化できる。

(8) Mary handed in her homework yesterday.

名詞句が代名詞になった場合も、bring ~ out と同様である。

## 2.3.前置詞の前の名詞句が省略される場合

上のサブセクションでは、前置詞の後ろに来るものが省略された場合を見たが、前置詞の前の名詞句が省略されることもある。

### 2.3.1. Take to A

この熟語は「A が好きである」という、一見して、なぜこのような意味になるのかわからないケースであるが、本来は、take [oneself to A]であり、その oneself が省略されたと考えられる。そして、To の基本イメージとして、~ to ...で「~が...に向いている」ことがある。このことがわかると、oneself to A で、「自分を A に向いている」状態となり、好きであるから、そのような状態になっていると考えられる。結果、以下のような例文では、

(9) They will take to you.

「彼らはあなたのことを好きになるでしょう」という意味になる。ちなみに、「~にふける」という意味もあるが、これも同様に説明できる。これに類する例として、see to ~「~の世話をする」などがある。

### 2.3.2. Make believe ~

少し道がそれるが、省略はいわゆる英熟語というものを理解・暗記する際に、絶えず、気に留めておきたい考え方である。make believe ~もそのような例で、これだけでなぜ「~のふりをする」という意味が出てくるのか不思議に思われるかもしれないが、本来は、make people believe ~「人々に~を信じさせる」という形で、そこから、people が省略されたと考えるとすんなり理解できると思う。例文を挙げておくと、

(10) Let's make believe we are pirates.

で、「海賊のふりをしよう」という意味になる。

take to ~も make believe ~も動詞 take や make は基本的に他動詞であるから、その後には名詞句といった目的語が来ているはずなのに、来ていないと気付くことが省略に気づくコツであり、文法の知識があると有効であることがわかる。

#### 2.4. 変形がおこっているもの

以上、熟語を理解・暗記する際に有効な方法として、前置詞の意味と省略の有無について見てきたが、これらの方法だけでは意味の予測が不可能なケースも存在する。そのようなケースを以下に見ていく。

##### 2.4.1. Inform A of B

例文から見ていく。

(11) The teacher will inform [us of the test results] tomorrow.

inform A of B で「A に B を知らせる」という熟語であるが、今迄のように、us of the test results に注目しても、「われわれは試験結果の一部分」とか「われわれは試験結果から離れる」というような意味不明のものになってしまい、上で紹介した方法では、解析できない。このような場合、変形が行われた結果、(11)のようになったと考える。では、変形の行われる前は、どうであったかという点、

(12) The teacher will give us information of the test results tomorrow.

となる。その意味は、「明日、先生は、われわれにテスト結果についての情報を教えてくれるでしょう」となる。ここから、名詞の information が移動して、give と合体し、その結果、動詞 inform ができたと考えれば、(11)が生まれることになる。

しかしながら、think of ~「~について考える」、know of ~「~について知っている」のような句動詞から、前置詞 of には「~について」という about と似た用法があると考えることが可能だと思われる。その際に、問題となる点として、about に比べて、of が使えるケースは限られているということである。たとえば、

(13) What are you going to do about/\*of it?

(13)のような状況で、of を使うことは難しい。すなわち、of が「について」に似たような用法を示すのは、普通、上で見たような句動詞かそれとも He wrote a book of/about animals.のような、「名詞+of+名詞句」に限られる。inform A of B も変形前は、information of B という形になり、「名詞+of+名詞句」に当てはまる。さらには、think of 名詞句や know of 名詞句も have a thought of 名詞句、have a knowledge of 名詞句から、派生したと考えることもできる。こうなると、すべてのケースが「名詞+of+名詞句」のケースに帰することが可能となる。

同様な例に、remind ~ of ...「~に...を思い出させる」、notify ~ of ...「~に...を知らせる」、suspect ~ of ...「~に...の疑いをかける」、avail oneself of ~「~を利用する」などがあり、それぞれ、give ~ a reminder of ...「~に...を思い出させるものをあたえる」、give ~ a notification of ...「~に...の通知をあたえる」、give ~ a suspicion of ...「~に...の疑いをかける」、give oneself availability of ~「自分に~の利用(の権利)を与える」などから、変形したものと考えられる。

#### 2.4.2. Help A with B

変形が有効なもう一つの例に、help A with B「A の B を助ける」がある。まずは、例文から。

(14) The boys helped [their uncle with the gardening]

この例文も、以前の見方で行くと、their uncle with the gardening で「叔父がガーデニングと一緒にいる」という意味不明なものになってしまう。しかしながら、inform A of B で見たような変形を適用してみると、うまく理解できる。(14)が変形する前は、以下のものであったと考えられる。

(15) The boys gave their uncle help with the gardening.

(15)の意味は、「少年たちは、叔父に、ガーデニングの手助けをあたえた」となり、「少年たちは、叔父のガーデニングを手助けした」という意味になる。この場合も、同様に、名詞 help が移動し、動詞 give と合体した結果、動詞 help になり、(14)が出来上がったと考えられる。

このような分析方法が必ずしも見当外れではない証拠として、名詞 hand は help「助け」の意味でも使われるが、そうすると、(15)は以下のように書き換えることができる。

(16) The boys gave their uncle a hand with the gardening.

give ~ a hand with …で「～に. . . の助けをする」という熟語があり、これは、(14)の変形前の(15)の形とそっくりであることから、以上のような分析もあながち間違っていないと思われる。

ここでも、inform A of B の場合と同様に、help A with B の with には「～に関して」の意味があると主張することも不可能ではないが、with の用法を必要以上に増やしたくないということが一つの理由としてあげられる。さらに以下の例からもわかるように、「～に関して」という with の用法は非常に限られている。

(17) \*They taught us (something) with life.

(17)では、「彼らは人生について(何か)教えてくれた」という意味には普通ならず、非文である。しかし、本主張では、provide A with B でみたように、一様に、「A と B は一緒; A が B を所有」という with の意味で説明できる。

以上、いわゆる英熟語と呼ばれるものを見てきたが、上で紹介した方法は、英熟語のレベルにとどまらず、二重目的語構文、結果構文、といったいわゆる構文といわれるものの分析にも力を発揮するが、それについては別の機会にゆずることにする。

#### 参考文献

ジョン・ビントリフ、森田久司(2007)『日本人が知らない英語の必須フレーズ 150』研究社  
ジョン・ビントリフ、森田久司(2009)『日本人が使えない英語の重要フレーズ 125』研究社